

レポート



大学開放を地域連携に生かす方策

全日本大学開放推進機構理事長 香川 正弘

大学開放は、地域の社会人に大学の研究・教育を開放することです。「大学開放を地域連携に生かす方策」を考えるにあたっては、大学とそれを取りまく地域社会の個性的な文化と地域を構成している諸団体を知ることが必要です。こうした認識なくして、地域社会に貢献する大学開放は成り立ちにくいのではないかと考えてきました。なぜなら、大学が提供できる大学開放の内容と、地元の住民が学びたいと思っている真のニーズとの間に乖離があると思うからです。

この問題については長い間にわたって考えてきましたので、今回は、前段で私自身の地域の学び方、後段で地域に求められる大学開放の進め方について話をしたいと思います。

1. 地域社会への関心は「在所に惚れよ」から

まず自己紹介からしておきます。私は広島市の生まれで、広島の小中高大学大学院を出て、大学に奉職し、各地を回って、現在は退職して墳墓の土地である広島に住んでいます。研究テーマは一貫してイギリス大学拡張史の研究、大学での担当科目は生涯教育学でした。この短い自己紹介から、郷土意識の問題を考える糸口が見えます。

第1は、大学教授で受教育歴が全部郷里であるという人は、東京は別としてあまり多くはないのではないのでしょうか。高校まで地元で教育を受け、大学は他郷へ進学が多いかと思えます。大学生になってはじめて行動の自由が得られ、地域社会の多様な実態を知的・情緒的に理解するのが深まるので、地元で一貫して学んだというのは、地域社会を見る目が少しは育っていると思えます。

第2は、墳墓の土地という表現です。先祖は800年ぐらい前に関東から広島へ移り、現在に至ると聞いています。親族の大半は広島市内に住んでいます。このような環境の中で生まれてくると、自分の中に郷里の天地の精気が籠もっているという自覚があり、子孫にも郷里を離れないで繋いでくれるように望む気持ちが強いものです。また、友達の関係の濃いのは、少なくとも明治以前から同じ郷里に住んでいる家系の人たちです。それは、長い歴史の中で、先祖がその人たちと労苦と楽しみを共にしてきたことが現在生きている私たちの身に沁み込んでいるからでしょう。市町村史を読まればわかると思いますが、地方の地域には同一地域に先祖代々住んでいる家が多いのです。

地元の人間は、地域社会を構成する住民が繋がる組織を良く知っており、また、地域における

二千年に及ぶ歴史の流れ、神話、合戦、祭礼、集落の成り立ち、地場産業の発達、街道、昔話や詩歌など、その地域特有の歴史・文化・産業・生み出した歴史上の人物のことも知っていて、それが郷土意識と自らのアイデンティティを支えています。かつて訪ねたところに、山口県岩国市玖珂町の千人塚があります。そこには宇野千代が執筆した「史跡 千人塚に想ふ」という石碑があり、次のように刻まれていました。

史伝によれば、戦国大名安芸の毛利元就は厳島の合戦で陶晴賢を破り、勢いに乗じて、周防長門へ駒を進めた。その最初の戦は玖珂盆地における鞍掛合戦であった。

大内氏の三家老の一人、この地方を治めていた治部大輔杉隆泰は、1300名の部下と共に鞍掛城に立て籠もり、毛利軍7千を迎え撃ったが、多勢に無勢、砦を枕に壮烈な討死をとげたといふ。弘治元年(1555年)11月14日のことであった。

血縁地縁につながる者の一人としてここ千人塚に眠る将兵の悲憤に思いを致し、心からその霊を慰めたい。(昭和63年3月5日、宇野千代、玖珂ライオンズ倶楽部の依頼により識す。)

この碑文にある「血縁地縁につながる者」という感覚は、地元のあらゆる文物に通じるものです。しかし、地元の間人であるからといっても、これらのことを良く知っているとは必ずしも言えません。学ばなければわからないことです。幸田露伴が『一国の首都』(岩波文庫)で、江戸・東京の者として他国者が地域文化を無視するのを非難しているのも、これに通じることです。

他方、地域には、他郷から仕事の関係等で移住してきた新住民がいます。新住民も、地元の人と同様に出身地の故郷を心の中に持っていますが、新しく住んだ土地にまつわるこれらの中には無関心な場合が多いようです。新住民の中でも、大学の教授は、現在働いている在所の歴史と文化に関して無知である場合が多いように思います。大学教授の多くは、若い時から郷里を離れて大都会の大学で勉学し、自分に固有な研究テーマをもって自立していますので、地域にかかわらずに仕事も生活もできるからです。近江商人の家訓に「在所に惚れよ、家業に惚れよ、嫁さんに惚れよ」(滋賀県豊郷町、伊藤忠兵衛記念館掲示)というのがあります。私がいいたいのは、この中の「在所に惚れよ」というのが大学教授には欠けているのではないかと、言うことです。「在所に惚れよ」というのは、そうあってはじめて地域の人々のために働くことができるかといっているのだと思います。他国者の多い大学教員に対し、地元者の多い事務系にこそ、大学開放では頑張ってもらいたいところです。

2. 地域への関心

私自身の大学での担当科目は、「生涯教育学」でした。生涯教育学の組織化は、「生きがい」「くらしがい」「働きがい」の三分野で、地域の住民の学習ニーズに応じて行うものです。この場合、その基礎にあるのは住民の文化です。我が国の場合は日本文化であり、イギリスではイギリス文化、中国では中国文化ですが、我が国の場合は、長い歴史の中で日本文化が成熟しているだけでなく、他の国に比べて地方の独自の文化というのも発達しています。生涯学習を組織化をしていこうとする人は、こうした基礎をしっかりと押さえておかないと有効なプログラムを組むことができません。

私がこのことに気付いたのは、上智大学に赴任してからでした。これに気付いてからというもの、地域の歴史と文化から住民の学びと学習の組織化を考えることがいかに大切であるかと思うようになりました。それからというもの、地域を知るために、時間を惜しんで全国各地の地域探訪に出掛けました。地域探訪で訪ねるところは、神社、寺院、城趾、市役所、資料館、学校、図書館で、その一つひとつの詳細な記録を作ってきました。平成9年12月29日から現在までに訪ねた神社は2653社、お寺さんは2637、その他2359箇所となっていました。訪ねる主な目的は次の通りです。

神社：古代史、大和朝廷との関係、祭礼、郷土の英雄、地名由来、人々の心の拠り所

寺院：地域の統治、地域の人々の死、公益に尽くした人、人々の心の相談所

城趾：戦国時代、武家政治、心の拠り所

役所：市民憲章、市歌

資料館：生活、文化、産業の発達

学校（旧制中学）：校訓、校歌・応援歌、伝統行事

図書館：民謡、盆踊り口説などの民俗

社寺を主要な訪問地にするのは、その地域の歴史と文化が凝縮されて保存されており、かつその土地の生粋の人である神主や住職から直接お話を聞くことができるからです。町を総合的に見て歩くので、2日間で3つの町を調べるのがやっとというところでしょうか。鎌倉は延べ1週間、三浦半島は4日間、佐渡島は3日間かかりました。

いろいろな町を回ってみる時に特に関心をもって調べるのは、その地域の人々の心の拠り所はどこか、誇りの源泉はどこにあるか、住民に流れている生き方の範は誰にあるか、地域のまとまりの度合い、偉人を生み出した背景、地場産業発達の系譜、詩歌や盆踊り等を通じての住民の情緒的豊かさ、厄災の乗り越えて生きる<一所懸命>の精神等です。こうした内容が、その地域の住民のアイデンティティをつくっていますし、個性的なまちづくりの原動力にもなるものであるからです。

3. 大学開放と地域社会

全国的に地域探訪をしてきて、それぞれの地域の歴史・文化・産業等を学ぶと、どうしてもそれらが生涯学習の素材としてどのように学ばれているのか、ということが気になります。特に大学の公開講座との関連に関心があり、調べて見ることになります。気付いたことを3点ほど指摘しておきたいと思います。

(1) 社会貢献について

大学の社会貢献は、地域社会の繁栄と発展に役に立つように、大学の持つ人的・物的・文化的な資源を社会に開放することです。「地域社会の繁栄と発展」とは、文化的・経済的により成熟していくことですが、地元の住民にとってはもっと具体的で、子孫が末代までも今住んでいる地域で仕事ができ、かつ文化的にも不利益を被らずに生活できることに尽きます。このために有用であるならば、人々は誰とでも組むでしょう。大学の社会貢献は、この切実な思いに応えるものでなく

てはならないと思います。

大学の社会貢献に関する記事や論文、ホームページ等を読むと、大学は象牙の塔であって、素晴らしい知的集積があり、それを地域に開放するのだ、といわんばかりのことを書いているところもあります。我が国の大学が象牙の塔であったのかということは別として、現代のような高度情報化社会では、かつてのように地域社会において大学が知的独占状態にあるとはいえません。大学の行う社会貢献は、なんでもできる万能薬でもありません。自分の大学にとっての地域社会の範囲を明確に意識し、地域社会の一員として謙虚に貢献する態度が必要であると思います。この謙虚さがあまり感じられないところが問題です。

(2) 大学公開講座について

大学の社会貢献では、産学連携とともに主力になるのが、大学公開講座です。大学公開講座には、別名大学開放講座という言い方もあります。どちらの言葉にも大学の後に<教育>という用語が略してあります。公開という用語は、open とか public とか free というのが原語で、例えば、秘宝とか公開処刑とか、普通では見せられないものをちらっと見せるとか、公開処刑とか、というような意味合いがあるような気がします。

大学の行う社会人向けの講座に関する法的規定は、社会教育法第 48 条第 2 項に次のように規定されています。

文化講座は、成人の一般的教養に関し、専門講座は、成人の専門的学術知識に関し、夏期講座は、夏期休暇中、成人の一般的教養又は専門的学術知識に関し、それぞれ大学、高等専門学校又は高等学校において開設する。

これによると、講座の種類は文化講座、専門講座、夏期講座となっています。別の分け方では、教養講座、職業講座、専門教育 (post-experienced education) というの也有ります。これらに基づいて、ぜひ大学の提供している講座がどこに分類されるのかをしてみれば、やるべきことが出てくると思います。

今日の話で、市町村を単位にして域内の社寺を中心にその地域の歴史、伝統文化、産業、詩歌等を調べたといいました。これらは地域の人々の生涯学習の素材になるもので、公民館、図書館 (古文書の会)、歴史研究会等々の学習会で、地域の人々に人気の高いものです。なぜ人気があるかといえば、一所懸命に生活している自分がどのような地域の人間かというアイデンティティにかかわるからです。これらの地方文化をその土地の大学公開講座で調べて見ると、その地域に日本初、否世界最初というような事例があったり、学校教育で習ったりする事項があっても、大学は関心が薄いと見えて、講座にもとりあげていないところが多々あるのです。地域住民が誇りにしていることを、単なる郷土誇りで終わらせるのではなく、学問的に取り上げることが必要だろうと思います。特殊個別から普遍化をしていくのは、大学教授の得意とするところですので、大学開放に携わる人は「所在に惚れ」て、講座テーマを選び取っていくことが必須で、これが大学開放講座への住民の参加を誘う導入になると思います。

もうひとつ、私が行った講座で「サラリーマンシニアの生涯学習考」というのがありました。

その時の受講後の調査でわかったことは、

「仕事に代わる何かを求めたい。晩年に向かう新しい生き方のサジェストを得たい。新しい仲間や友人を探したい。自分の人生に一区切り付け出発したい」(香川正弘「サラリーマンシニアの生涯学習」『上智大学教育学論集』30号、1995年、29-64頁、57頁)

という気持ちが強いことでした。サラリーマンシニアは「仕事に代わる」ほどの真剣な学習の提供を望んでいるのです。

(3) 地域団体との連携について

大学公開講座の公開は、open=誰にでも開く、free=無料という意味があるのではないかと述べました。そのせいか、講座には、特定の職業集団や専門職集団を対象にしたものや寄付講座があまりみられません。職業教育や専門教育の部門での公開講座を開くとすれば、特定の職業団体との交渉があるはずです。大学教授は、一人ひとりが自分の専門学会に属し、かつ多くの教授が研究に関連する分野の職業団体や同好会等と関連があるものです。こうした教授と団体との交流が大学開放センターの活動に生きていないように思います。

また、地域には企業もたくさんあります。大学と企業との関連をいうと、すぐに産学連携や寄付金のお願などが思いつかれます。国内には企業城下町というのもたくさんあります。その企業の従業員及び家族には、他郷から赴任してきた方々も多いと思います。その人たち新住民を旧住民と和合一致させる郷土学の講座を開けば、そこから<まちづくり>の新しい発想も出て来るでしょう。このためには公開講座での個別企業の行う自己啓発の分野を取りこむ連携が重要であると思いますし、さらに企業の研修などで地元の大学で活用するようになってくれることが必要です。

大学が地域社会とのかかわりを深めていくことは、それぞれの大学の存立基盤を強化するためにも必要な方向であると思います。産学連携の部門や大学公開講座の部門にも、それぞれ専門のポストがついて人も配置されているようですが、そうした業務を担当する専門家としての養成が十分になされているとはいえません。大学開放の仕事に携わる教育職員や管理職員に必要な資質は何か、どのような学問を修めればその仕事の遂行が可能か、こういったことを明確にして、綿密なカリキュラムに基づいた研修と養成の体制を作り、専門職化していくことが現在もっとも求められていることと思います。

<注>本稿は、全日本大学開放推進機構主催「第10回大学開放フォーラム」(平成23年10月1日開催、於:上智大学)における「提言/大学開放を地域連携に生かす方策」をまとめたものです。

香川 正弘 (かがわ・まさひろ)

1942年広島市生まれ。広島大学大学院教育学研究科教育行政学専攻博士課程単位取得中途退学、教育学博士。四国女子大学講師、佐賀大学講師・助教授・教授を経て、1992年から上智大学教授、2008年に退職、同大学名誉教授。全日本大学開放推進機構理事長、生涯学習・社会教育研究促進機構理事長、健康・生きがい開発財団評議員、全日本大学開放推進機構理事長。修士論文「イギリス大学拡張の原初形態」(1968年)、博士論文「イギリス大学拡張成立史研究」(広島大学、1987年)。